

臨海部の交通充実へ市長

「幅広く将来像検討」

川崎市の福田紀彦市長は19日の市議会定例会で、市臨海部の鉄道ネットワークについて、「既存ストックの活用で早期に効果のある施策も含め、鉄道交通など最新の動向も踏まえた交通体系の将来像を幅広く検討したい」との考えを示した。

無所属の三宅隆介氏（多摩区）の一般質問に答えた。臨海部には約6万人が働いているほか、東扇島で恒例の「みなと祭り」に22万人が来場するなど各種イベントに大勢の人が訪れる。しかしアクセスは路線バス中心で、別形態の交通基盤

整備が長年の課題だった。鉄道計画として東海道貨物支線の旅客線化や（仮称）川崎アプローチ線が運輸政策審議会答申第18号に位置付けられているが、進展が見られないのが実情だ。市は昨年まとめた市総合都市交通計画で、臨海部の交通機能強化を明記。福田市長は答弁で「交通体系の充実は、今後の臨海部のさ

らなる発展を目指す上で大変重要なテーマ」と述べ、より具体的な交通体系のあり方の検討をスタートさせる考えを示した。

三宅氏は、市がLRT（次世代型路面電車）や電池電車、水素エネルギーに取り組んでいることを念頭に、水素燃料電池の活用などを提案した。

（鈴木 昌紹）